

◎第115回例会は下記の通り行います。◎

第115回例会のご案内

日 時：2008年5月21日（水）19：00～

内 容：内野 正氏（東京都埋蔵文化財センター）
「千代田区和泉伯太藩・武蔵岡部藩上屋敷跡遺跡の発掘調査」

会 場：江戸東京博物館 学習室2

交 通：JR総武線両国駅西口改札 徒歩3分
都営地下鉄大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口 徒歩1分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室
03-5452-5103（寺島・堀内・成瀬）

江戸遺跡研究会公式サイト
<http://www.ao.jpn.org/edo/>



◇江戸遺跡研究会第114回例会は、2008年3月18日（火）午後19時00分より江戸東京博物館学習室◇
◇2にて行われ、高島裕之氏より以下の内容が報告されました。◇

17世紀後半における有田・南川原山の陶磁器生産

高島 裕之

(駒澤大学禅文化歴史博物館)

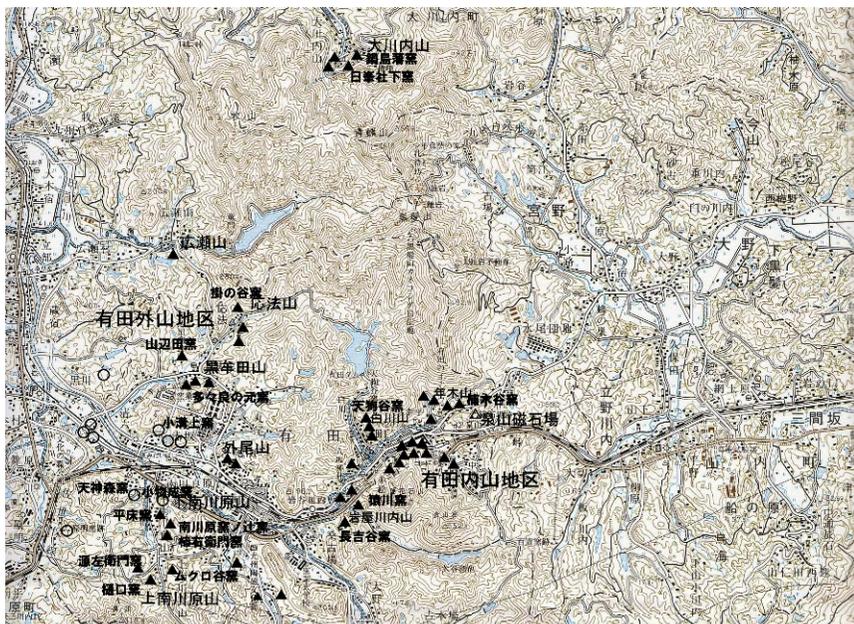


図1 有田周辺の古窯跡(国土地理院5万分の1地形図「伊万里」を引用し作成)

1. 南川原地区の古窯跡

南川原地区は、佐賀県有田町の南西部、磁器の原料の採石地である泉山を中心とする内山地区の西側に位置する外山地区の窯場の1つである。有田の中で内山地区よりも良質な器を焼いた窯場で、1670年代にはいわゆる柿右衛門様式の乳白色手の素地が完成した窯場という点で知られている。寛永14(1637)年の有田・伊万里の窯場の整理・統合以前には、染付磁器が創始された有田の窯場の中心であった。整理・統合以降、磁器生産の中心となる内山地区が成立し、南川原地区の窯場は、整理の対象となり一時期廃窯になるが、その後17世紀中頃に窯場が再興された。17世紀後半に操業期間を持つ南川原地区の古窯跡は、下南川原山地区では、南川原窯ノ辻窯跡、平床窯跡、柿右衛門窯跡、上南川原山地区では樋口窯跡、ムクロ谷窯跡である。各々の古窯跡の概要は次の通りである。

①南川原窯ノ辻窯跡—過去に2回調査が行なわれていて、1985年に佐賀県立九州陶磁文化館が地表に残る登窯の一室より上の地点の物原の調査を行なっている(大橋1986)。1990年に駒澤大学が下部の窯体、物原を発掘調査し、概報が1993年に発表されている(倉田・千葉他1993)。調査では4基の窯体と物原が確認されていて、調査区のD-4区からY-4区まで広がる物原層ではD窯の造作も含めて既に

上部が削平されている。最も古い G 窯は最北に位置し、徐々に標高の低い南に向かって F 窯, E 窯と順次新しい窯を築いている。その際に焼成失敗品の捨て場である物原も、南側の谷

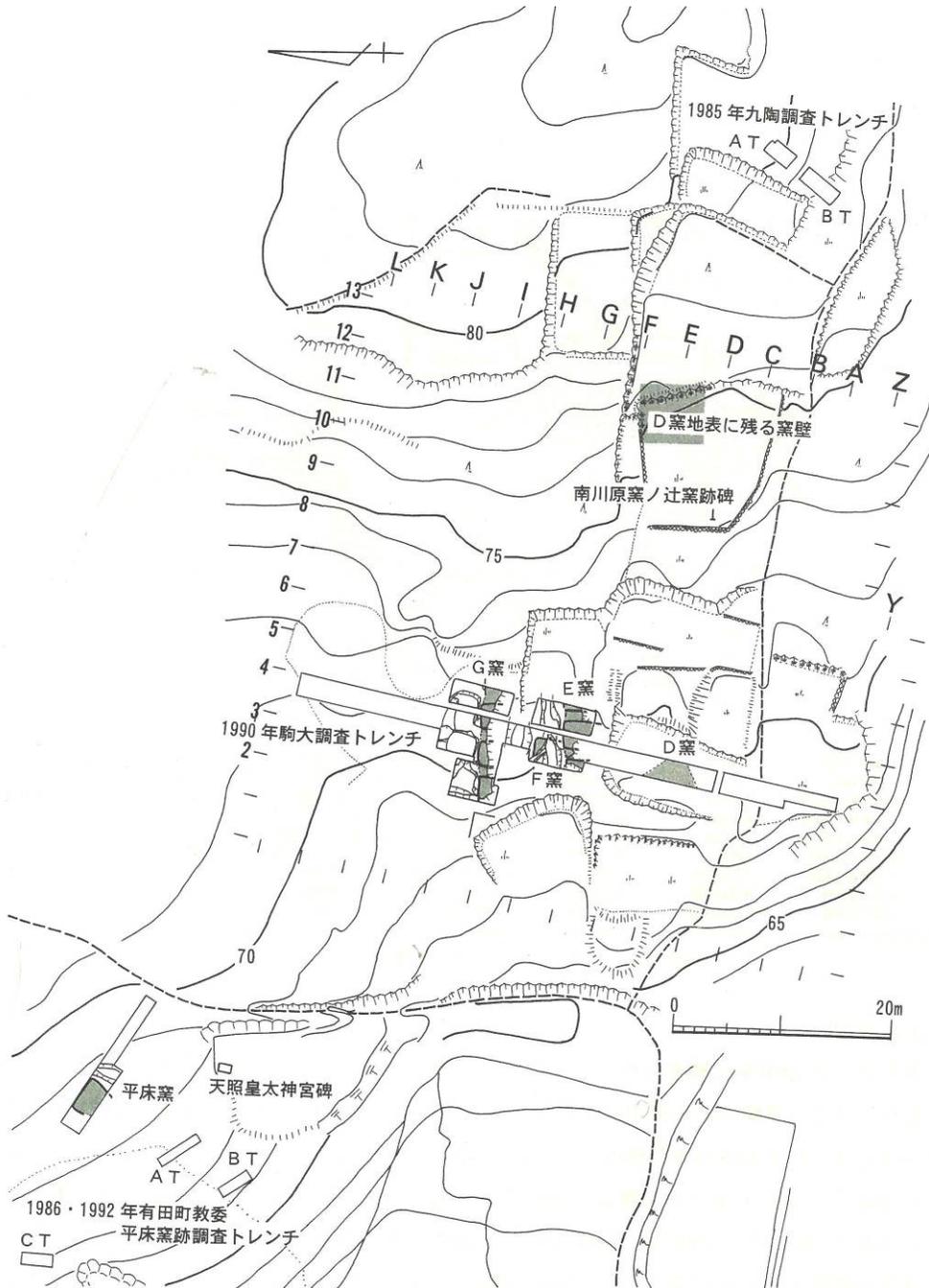


図2 南川原窯ノ辻窯跡周辺地形図

(大橋1986. p. 6. Fig.2, 倉田・千葉他1993. pp. 36-38. Fig. 2-4, 村上・野上1993. p. 50. Fig. 20を基に作成)

に向かって整地されてきた。物原層と窯同士の直接的な関係を、明確に組み合わせることは難しくなっている。物原最下層の製品の年代は、現在の編年観では 1650 年代と推測でき、その後何回かの休止期を持ちながら近代まで操業した窯場である。現在筆者らは、駒澤大学考古学研究室保管分の資料について、本報告の完成をめざして整理調査を継続していて、漸次その成果を発表している(高島・半田・江川・小野田2005-2007)。

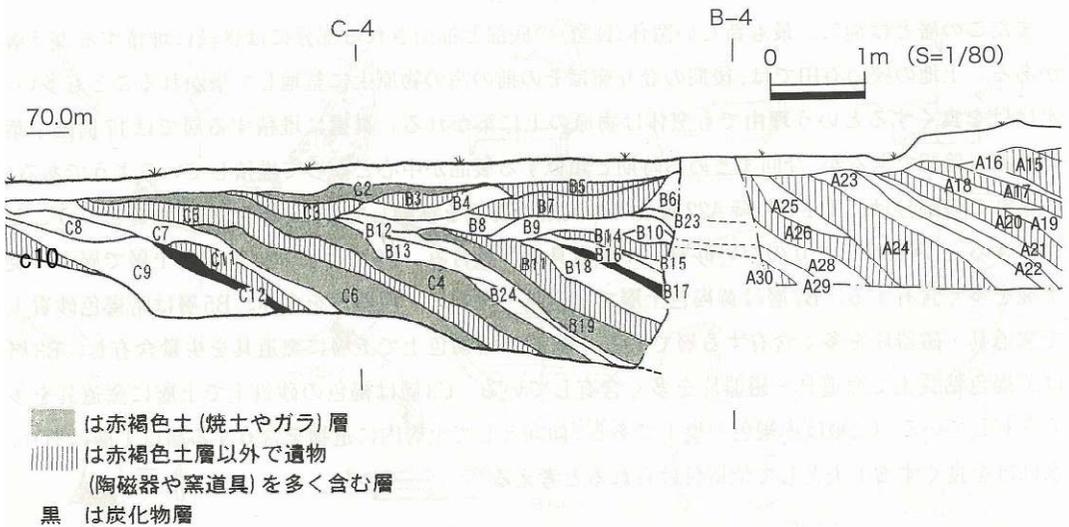


図3 南川原窯ノ辻窯跡物原堆積図(部分)(倉田・千葉他1993. p. 41. Fig. 7を基に作成)

②平床窯跡— 1986, 1992年に有田町教育委員会が発掘調査を行なっている(村上・野上1993)。南川原窯ノ辻窯跡に最も近い窯跡であり、天照皇大神宮碑(「宝暦13(1763)年下南嘉原山中」銘あり)の横に窯体がある。操業期間が極めて短いと考えられていて、推定年代は1650年代～1660年代である。物原の堆積は薄く、2次堆積と推定されている。物原出土の陶磁器は、染付網目文碗、染付寿字文碗が多く、他の染付製品では荒磯文碗・鉢、内側面に墨弾きを用いたハリ支えのみられる皿が出土している。中皿は上質の製品と位置づけられ、素焼を行なっている製品と考えられている。平床窯跡は、南川原窯ノ辻窯跡の一時期の窯の可能性も指摘されてきたが、南川原窯ノ辻窯跡の資料に明らかな断絶がみられず、墨弾きの皿など陶磁器も含め、重複する資料がみられるため、両窯は同時期に併行して操業していたと考えられる。

③柿右衛門窯跡— 1976～1978年に有田町教育委員会が3回発掘調査を行なっている(東中川忠美1976・1977・東中川忠美・吉永陽三他1978)。窯体は古い順にB・A窯の2窯体が確認されている。B窯は胴木間焚口から第18室奥壁下部まで水平全長約68.7m、比高差15.8mで、18室より上に下部と不整合となる3室がみられる。A窯は胴木間から第12室まで約42mである。1次調査から3次調査で試掘溝による物原の層位的な発掘も行なわれ、2次調査の概報では出土層位も明確にされている。2次調査の物原の試掘溝は、B窯第10室の北側の物原中央部に3m四方で設定している。断面図(東中川忠美1977.p.7,第7図)の14層の炭層とその直下の遺物を含まない15層の黄色土層は、1次・3次調査概報の時にも部分的に確認できた層である。遺物をあまり含まない黄色土層は、18層, 15層, 12

層と3回確認でき、少なくとも3回以上は、窯体を含めた地山を削る地形の改変を伴う大きな整地が考えられ、B窯の中での改変とA窯への築き直しに関連する土層と推測される。B窯焚口周辺の遺構の検出状況では、南側に作業段、北側に排水溝があり、作業段の位置と物原の位置が不整合となっている点も、B窯周辺の改良を示唆する状況といえる。

2次調査トレンチで遺物の確認できる最下層は19層であり、白磁の量が多く南川原窯ノ辻窯跡物原のC7・C6層で出土する松竹梅鶴亀文白磁皿(東中川忠美 1977.p.12,第12図-7)が大量にみられる。南川原窯ノ辻窯跡ではC4層までみられる高台外側に圏線1、高台内に円圈1を配し、外側面を無文とする染付皿は、14層と15層の間層までみられる。乳白色の白磁は11層以上で増加し、7層では染付、白磁、青磁、鉄釉陶器などが組み合わせで確認でき、中央に蝗を描き裏文様が花唐草文の芙蓉手皿(東中川忠美 1977.p.11,第11図-2と同例)が大量に出土している。5層では内側面に牡丹唐草を描く皿や染付猪口がみられるようになる。組み合わせとして、牡丹唐草文の染付、乳白色の白磁、胎土の白い青磁、猪口が出土するのが5層からである。2層では内面底部に四弁花を配置する碗が確認できる。最終段階のA窯床面の資料は、見込五弁花の型打ち小皿や、牡丹唐草見込桐梅文型打ち小皿、水仙文型打ち小皿、型打ち小瓶である(尾崎・大橋 1986.図版 252-4・5, 253-4・5)。

④樋口窯跡— 1984年に佐賀県立九州陶磁文化館、1982、1988年に有田町教育委員会が調査を行っている。4基以上の窯の存在が推測され、4号窯(1640年代～1650年代)・1号窯(1650年代～1660年代)・2号窯(17世紀末～1720年代頃)・3号窯(18世紀後半～19世紀)の順に操業している(村上・野上 1998.p.348)。4号窯は道路に焼成室の断面が確認されているが窯体は未調査である。遺物は、鉄釉陶器(碗・瓶・壺・すり鉢・蓋)を主体に生産している。染付磁器は物原下層に集中して出土し、碗、皿、人形などがあり、口径13cm前後の丸小皿が多い。碗は少なく、染付窓絵網目文碗破片がある。1号窯の窯体は、3号窯の物原の下に位置しているが、詳細は不明である。物原層も厚さ8m以上に及ぶ3号窯の物原の下にあるため、遺存状況は不明である。出土する鉄釉陶器は4号窯の製品と酷似しているため、一部は4号窯の製品の可能性も指摘されている(村上・野上 1998.p.351)。1982年調査の物原最下層では染付荒磯文碗、染付瓶などが出土している(大橋 1985.p.24, Fig.16)。皿では内側面に魚文を描く皿、芙蓉手皿や芙蓉手皿の種類のいわゆる明山手の皿なども表採で確認されている。2号窯は、高さ約75cmの塗壁の側壁を持つ1室が確認され、平均幅は4.8mである。磁器の他に陶器の鉄釉の小皿が多く、南川原窯ノ辻窯跡B-4区B11層以降の様相と類似している。

2. 南川原地区の陶磁器生産

南川原窯ノ辻窯跡の遺物整理調査の成果として、他の南川原地区の窯場と比較しながら、過去に考察してきた要点は、以下の通りである。

①窯場の成立期(1650年代)

a. 南川原窯ノ辻窯跡物原最下層の主製品

南川原窯ノ辻窯跡物原最下層の製品には碗、皿、瓶、香炉などがあり、主製品ともいえるのが染付碗である。文様別の比率は、網目文約30%、寿字文14%、草花文10%、葡萄文5%、圏線文5%などで、圧倒的に網目文が多い。またほぼすべての器種にわたって高台際に手跡を残し、畳付部分に砂が付着するなどの従前の一般的な技術を用いて、焼成された製品がみられるいっぽう、皿では高台径を大きくし、窯詰めの際にハリ支えを行なう例が白磁小皿、染付中皿にある。逆三角形の高台には砂を

残さず、素焼も行なわれているようであり、技術差が顕著に表れているのが皿である。

b. 染付網目文碗の施文方法からみられる内山地区の窯場との関係

最下層で最も多く出土し、有田の他の窯場でも1640～1660年代にみられる染付網目文碗は、曲線を重ねた形で構成され、中に魚文を配置するのが本来の形である。碗の中で網目を構成する曲線の段数についてみていくと、4段と数多く連ねて構成する例は、応法山の弥源次窯、広瀬山の広瀬向1号窯物原出土資料など一部の窯跡を除いて、天狗谷窯B窯、谷窯、猿川窯、長吉谷窯などいわゆる内山地区の窯場中心に確認できる。そして山辺田1・2号窯、掛の谷2号窯、コウタケ窯、吉田2号窯などのいわゆる外山地区と周辺の窯場では、2段と段数の少ない例があるが内山地区ではあまりみられず、すなわち内山地区よりも略描の形になっている(九州近世陶磁学会2000. p. 86-92)。

南川原窯ノ辻窯跡物原最下層では、曲線を4段連ねる例と3段連ねる例がみられ、2段連ねる例は確認できていない。段数の少なさは器高との関係もあると考えるが、同じ高さの中で4段と3段の例があるので描き方の問題であろう。精粗の目安としてなので厳密なことはいえないが、10層の染付網目文碗の文様の描き方は、本来の形に近い内山地区の窯場との関係を推測することができる。

c. 下南川原山地区と上南川原山地区の成立期の製品の違い

有田における窯場の整理・統合以降、1640年代に樋口窯跡、その後南川原窯ノ辻窯跡が成立する。上南川原山地区の樋口窯跡は、当初は鉄釉陶器製品が量、種類とも多いという点で、主製品が染付碗である南川原窯ノ辻窯跡と異なっている。各々の製品の違いは、承応2(1653年)の『万御小物成方算用帳』「有田皿屋」の中の「南川原山」と「南川原皿屋」と、南川原地区に2つの窯場が確認できることの意味を示していると考ええる。

②複数の窯の併行期(1650年代後半～1670年代)

a. 柿右衛門窯跡の物原層出土製品との比較

【1】「その前後関係」— 1650年代後半以降、年木山から移動してきた陶工集団との関係が指摘されている柿右衛門窯跡では、中皿、小皿を中心とした製品が多くみられ、碗は確認できるが数が少ない。つまり皿が主体の段階から操業を開始しているようである。いっぽう南川原窯ノ辻窯跡では製品の中心が碗の段階を経て、皿の出土の割合が増加し、その段階で柿右衛門窯跡と共通する資料がみられる。つまりその影響を受けた製品の変化と捉えることができ、南川原窯ノ辻窯跡は柿右衛門窯よりも先に操業している可能性が考えられる。

【2】「製品の質の幅」— 両窯が併行している段階でも、施釉の際の手痕を残す皿もみられる点で、南川原窯ノ辻窯跡物原層の様相は異なっている。南川原窯ノ辻窯跡物原 C6 層を中心とする段階では、皿を作る際に施釉の手痕を残した旧来の技術を用いて製作する集団と、高台径を広くし、高台内に放射状のカンナ削り痕がみられるなど新たな技術を用いて製作する集団があり、器種や陶磁器の成形技術の違いから複数の陶工集団の存在を推測できる。成形技術の違いは、同じ種類や寸法の製品にはあまり確認できないため、競合しなかったのかもしれない。

【3】「製品組成の類似」— 柿右衛門窯跡の物原では従来から指摘されているように、染付製品では型打ち成形などを行なう上質皿の内面文様の描法に変化がみられるが、その変化は南川原窯ノ辻窯跡の物原でも確認できる。C6 層を中心とする段階までは、内面文様の線描きが太いが、B 19, B11 層でみられる細線の段階になると、呉須の濃淡を巧みに用いて段階的な色使いが行なわれるようになる。染付皿にみられる文様の描法の変化は、上質の皿を一定の水準で同質に仕上げるため技術が洗練して

いた結果と考えられ、線描も不安定な太線より、細線が選ばれたと考えられる。

B19, B11 層では線描きの細い染付皿、乳白色の白磁製品、胎土の白い青磁製品と、腰部下無釉の鉄釉陶器碗を中心とする陶器製品の組み合わせがみられ、南川原窯ノ辻窯跡でも柿右衛門窯跡と同種の文様を描く芙蓉手皿の破片と鉄釉陶器が共伴している。

③陶器生産の終焉期(1670～1720年代)

a. 南川原地区の陶器生産

南川原地区の中では、当初上南川原山地区の樋口窯跡が陶器生産の中心であり、4号窯(1640年代～1650年代)では鉄釉陶器を主体に生産している。その後1号窯から2号窯へと変遷していくが、2号窯の物原と考えられているC T III層でも鉄釉碗が確認されている(大橋 1985. p.21. Fig.13)が、それ以降の層では確認できない。また1680年～1750年代に操業期間を持つムクロ谷窯では、陶器の生産は確認できないようである。2号窯の操業年代の下限が1720年代であり、上南川原地区ではそれまでには陶器生産がみられなくなると判断できる。

下南川原山地区の南川原窯ノ辻窯跡でも、最も古いG窯の床面や物原C 6層などで単色釉の碗(年代は1650～1660年代)が確認されている。それらは高台端部のみを無釉にする磁器碗と同じ様式を持つ碗であり、上南川原山地区で主流の腰部下無釉の製品とは異なっている。下南川原山地区では腰部下無釉の鉄釉陶器碗は、乳白色の白磁の登場と前後して、柿右衛門窯跡や南川原窯ノ辻窯跡の物原層で確認できる。陶器には碗・鉢・片口・瓶・火入れ(香炉)・水注など様々な器種があり、製品の主体は鉄釉製品が多いがそれ以外の種類の陶器も確実にみられることから、南川原地区では上・下両方の地区で一時期一定量の陶器生産が行なわれていて、生産された陶器の器種は、壺、甕などの大型製品ではなく、磁器焼成の中で併焼のできる器種が選ばれたと考えられる。陶器生産はA 24層以降の層では確認できなくなり、長い南川原窯ノ辻窯跡群の操業の中で陶器生産はここで断絶したと考えられる。乳白色の白磁もなくなることから両者の推移する年代は下南川原山地区では同じと考えられ、その生産期間は比較的短期間であったと推測できる。

b. 同じ窯内での製品の多様性とその意味

染付磁器ではB19層までで確認できた口径30cm以上の大皿はみられず、口径6cm前後の様々な猪口がみられる。猪口はA 28層からA 24層で出土し、その文様も型打ちち成形で輪花型にし、口鏤装飾を行ない、高台内銘の残る破片は「渦福」銘の入る例が多い。また一定の上質の水準の中で、同質に仕上げようとする製品の他に、皿の中でもA 24層以降、濃みのみで文様を表現する例(A 24-13～15)がみられ、それは筆跡を同じように仕上げる意識がみられないといえる。全体的に粗放な作りの製品もみられ、染付碗、仏飯器は、透明釉の掛け方にムラが見られ、施文方法も厳密な意味で同じ筆致で仕上げられていない例であり、製品の質の差を窺うことができる。

2回(九州陶磁文化館・駒澤大学)の南川原窯ノ辻窯跡の発掘調査では、陶器製品が一定量確認できる点など陶磁器の内容が異なる点がある。内容の違いは、登り窯の上の部屋の製品と、下の部屋の製品の差が出たとも推測され、焼成室の場所を選び、焼成条件に合わせた製品の選択が行なわれている可能性や共同窯としての多様性を考えることができる。

3. 陶磁器からみた陶工の移動

南川原地区では、1650年代後半の中で染付碗から、上質な染付皿への大幅な主製品の変化が認め

られる。この変化は、酒井田柿右衛門家を中心とする陶工集団の年木山からの移動も大きく関わっていると考えられる。つまり 1637 年の窯場整理以降、年木山の陶工が南川原に移動する以前に南川原では窯場が再興された可能性が高い。その陶磁器の施文方法は、外山地区の製品より内山地区の製品に類似性がみられることから、陶工集団の一部は内山から移動してきた可能性があり、それに呼応する形で 1650 年代後半～ 1660 年代前半に、年木山の陶工集団が移動してきたと考えられる。つまり内山地区から南川原地区への陶工の移動は、少なくとも複数の段階を経ていると思われる。

年木山から移動してきた陶工集団が製作していた製品群とは異なる器種も確認でき、内山地区でも他の窯場との関係が考えられる。製品の類似性からその関係性を推測する場合、陶工の技術交流であるのか、直接の移動、移入であるのかは、両者が併行して製作されていたのか、前後関係があるのかを整理する必要がある。南川原窯ノ辻窯跡で見られる青磁瓶や大皿などの器種は物原の前層に同種の製品がみられず、新しい種類の製品として確認できた資料であり、陶工の移動、移入の可能性も想定することができる。

1650 年代から 1660 年代の製品の変化と 1660 年代から 1670 年代の変化では、変化の質が異なっていることが窺える。すなわち前者は、中心となる製品の種類そのものの変化であり後者は製品の質の変化である。製品の上質皿には、種類が染付、白磁、青磁があり、共に 1670 年代頃を境に変化していくと捉えられる。すなわち、染付は線描きの変化がみられ、白磁は乳白色の製品、青磁は胎土が白い製品がみられる。

17 世紀後半の中で、南川原地区に一定量確認できる陶器生産も、18 世紀初頭になると確認できなくなり、陶器生産はここで断絶したと考えられる。断絶した年代以降の層からは、乳白色の白磁もなくなることから両者の推移する年代は、同じと考えられる。陶器生産の断絶と陶工集団の関係について特に移動という点に関しては、可能性として現川焼(長崎県長崎市)の創始との関係も、選択肢の 1 つとして考えることもできる。

以上のように南川原山、特に下南川原山地区の窯場は、「有田皿屋」の延長上の中で成立し、その後も継続してあくまで「有田皿屋」の延長上の高級磁器焼成の窯場であったと考えられる。特に製品の種類の中で南川原山の中で生産された色絵磁器は、いわゆる「柿右衛門様式」に必要な不可欠な「乳白色手」の完成へと向かっていったと考えられるが、染付製品には色絵生産に特化した目的の中で付随した製品生産の形を見ることができる。

今後は南川原の陶工の移動をめぐる窯道具を含めた検討、文献との整合性も含めて検討し、有田の窯場の中でも陶磁器生産をリードしてきた南川原山の陶磁器生産の実体について、真の意味での解明に近づいていけたらと考えている。

※本発表は、過去に『駒澤考古』等にまとめさせていただいた内容を再構成している。日頃より整理調査に関して、ご指導、ご協力いただいている関係各位に深く感謝申し上げる共に、発表の機会をいただいた江戸遺跡研究会に心よりお礼を申し上げます。

【主要参考文献】

大橋康二 1985:『百間窯・樋口窯-肥前地区古窯跡調査報告書第 2 集-』佐賀県立九州陶磁文化館,有田
大橋康二・尾崎葉子 1986:『有田町史古窯編』有田町史編纂委員会,有田

- 大橋康二 1986:『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯-肥前地区古窯跡調査報告書第3集-』佐賀県立九州陶磁文化館,有田
- 大橋康二監修,藤原友子編 2003:『柴田コレクション総目録』佐賀県立九州陶磁文化館,有田
- 九州近世陶磁学会 2000:『九州陶磁の編年』有田
- 倉田芳郎・千葉基次他 1993:『遺物・文献両面から見た近世肥前磁器』東京
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1999:『柿右衛門-その様式の全容-』有田
- 高島裕之・江川真澄・小野田恵・半田素子 2005-2007:「有田・南川原窯ノ辻窯跡出土の陶磁器」『駒澤考古 30-32』駒澤大学考古学研究室,東京
- 野上建紀 2002:『近世肥前窯業生産機構論-現代地場産業の基盤形成に関する研究-』金沢大学学位論文
- 東中川忠美 1977:『柿右衛門窯跡発掘調査概報』有田町教育委員会,有田
- 東中川忠美 1978:『柿右衛門窯跡第2次発掘調査概報』有田町教育委員会,有田
- 東中川忠美・吉永陽三他 1978:『柿右衛門窯跡第3次発掘調査概報』有田町教育委員会,有田
- 村上伸之・尾崎葉子 1989:『窯の谷窯・多々良の元窯・丸尾窯・樋口窯-町内古窯跡群詳細分布調査報告書第2集』有田町教育委員会,有田
- 村上伸之・野上建紀 1991:『向ノ原窯・天神山窯・ムクロ谷窯-町内古窯跡群詳細分布調査報告書第4集』有田町教育委員会,有田
- 村上伸之・野上建紀 1993:『小物成窯・平床窯・掛の谷窯-町内古窯跡群詳細分布調査報告書第6集』有田町教育委員会,有田
- 村上伸之・野上建紀 1998:『有田の古窯-町内古窯跡群詳細分布調査報告書第11集-』有田町教育委員会,有田

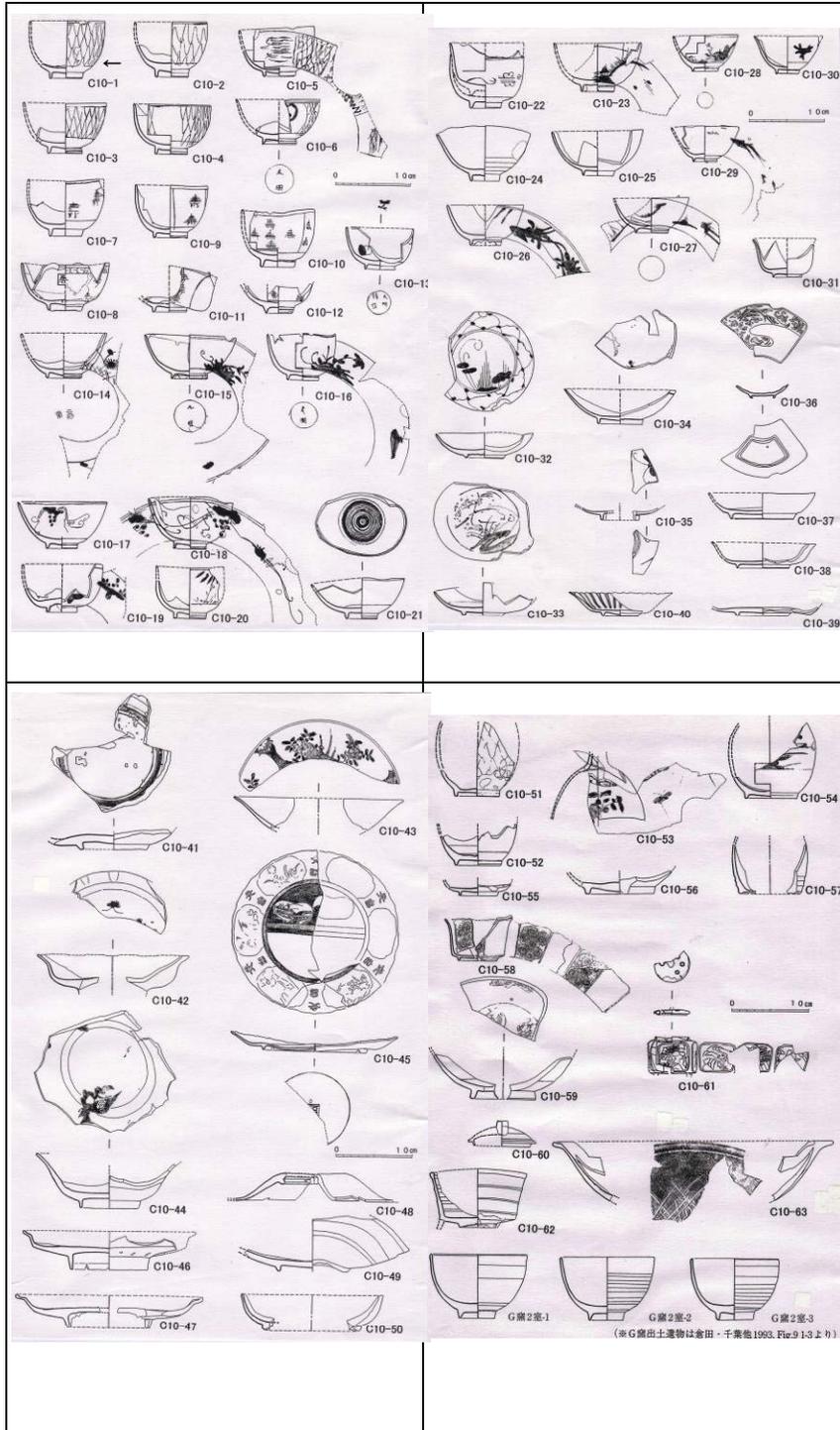


図4 南川原窯ノ辻窯跡（1990年調査）物原出土陶磁器（1）

（高島他2005. p. 71, 74, 76, 78. Fig. 3-6を一部加筆）

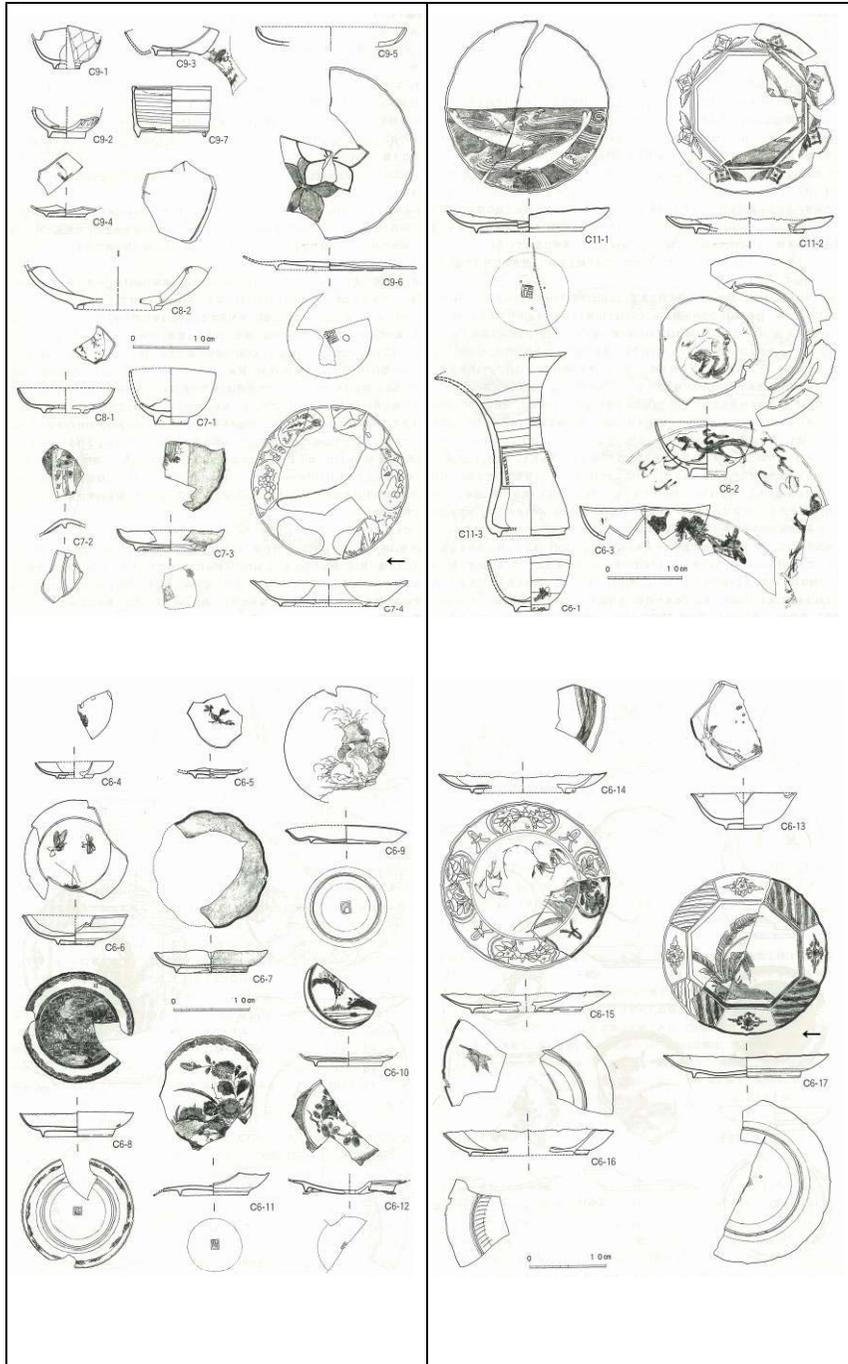


図5 南川原窯ノ辻窯跡（1990年調査）物原出土陶磁器（2）
 （高島他2006. p. 23, 25, 27, 28. Fig. 4-7より）

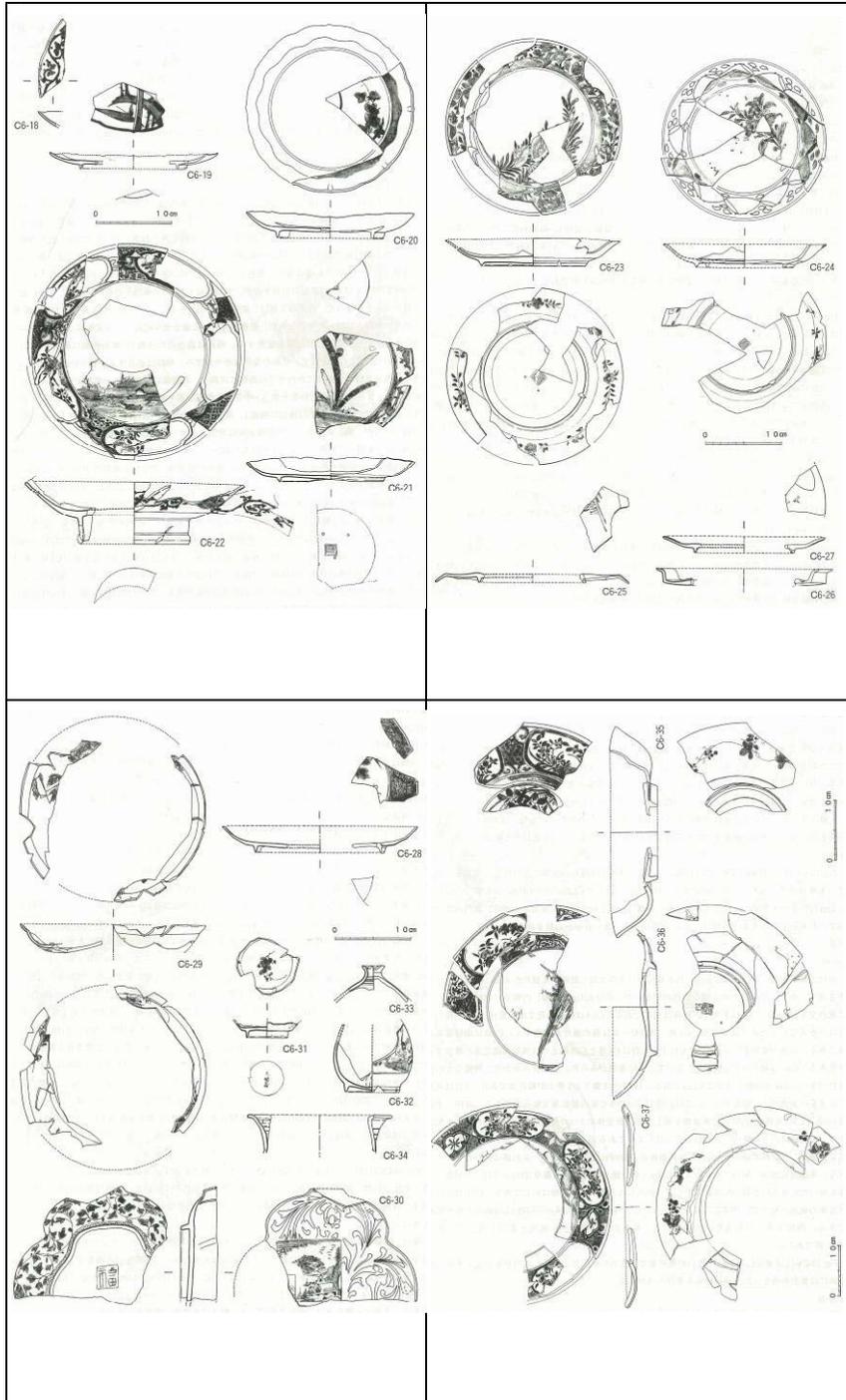


図6 南川原窯ノ辻窯跡（1990年調査）物原出土陶磁器（3）
 （高島他2006. p. 30, 31, 33, 35. Fig. 8-11より）

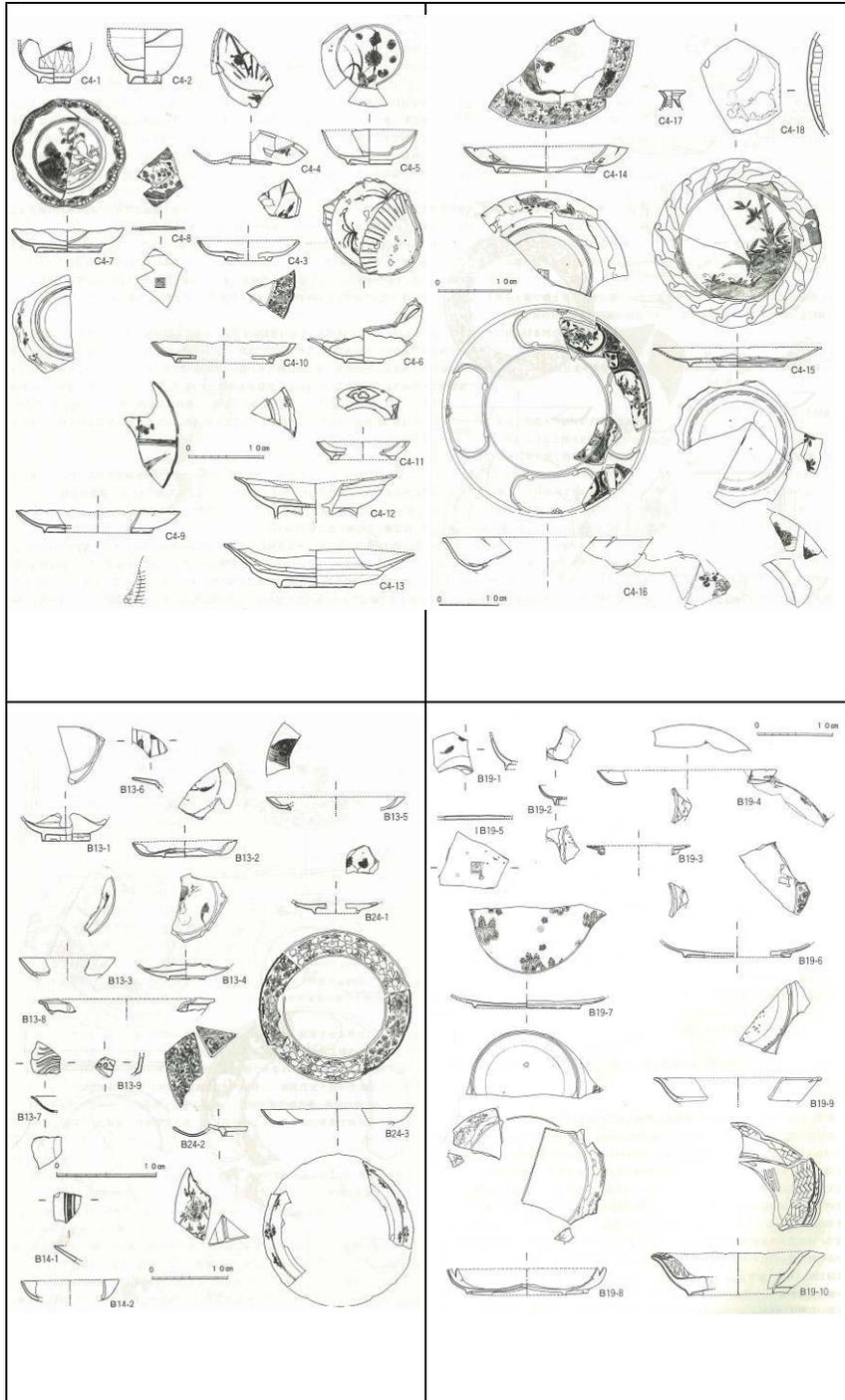


図7 南川原窯ノ辻窯跡（1990年調査）物原出土陶磁器（4）

（高島他2006. p. 37, 39, 40, 42. Fig. 12-15より）

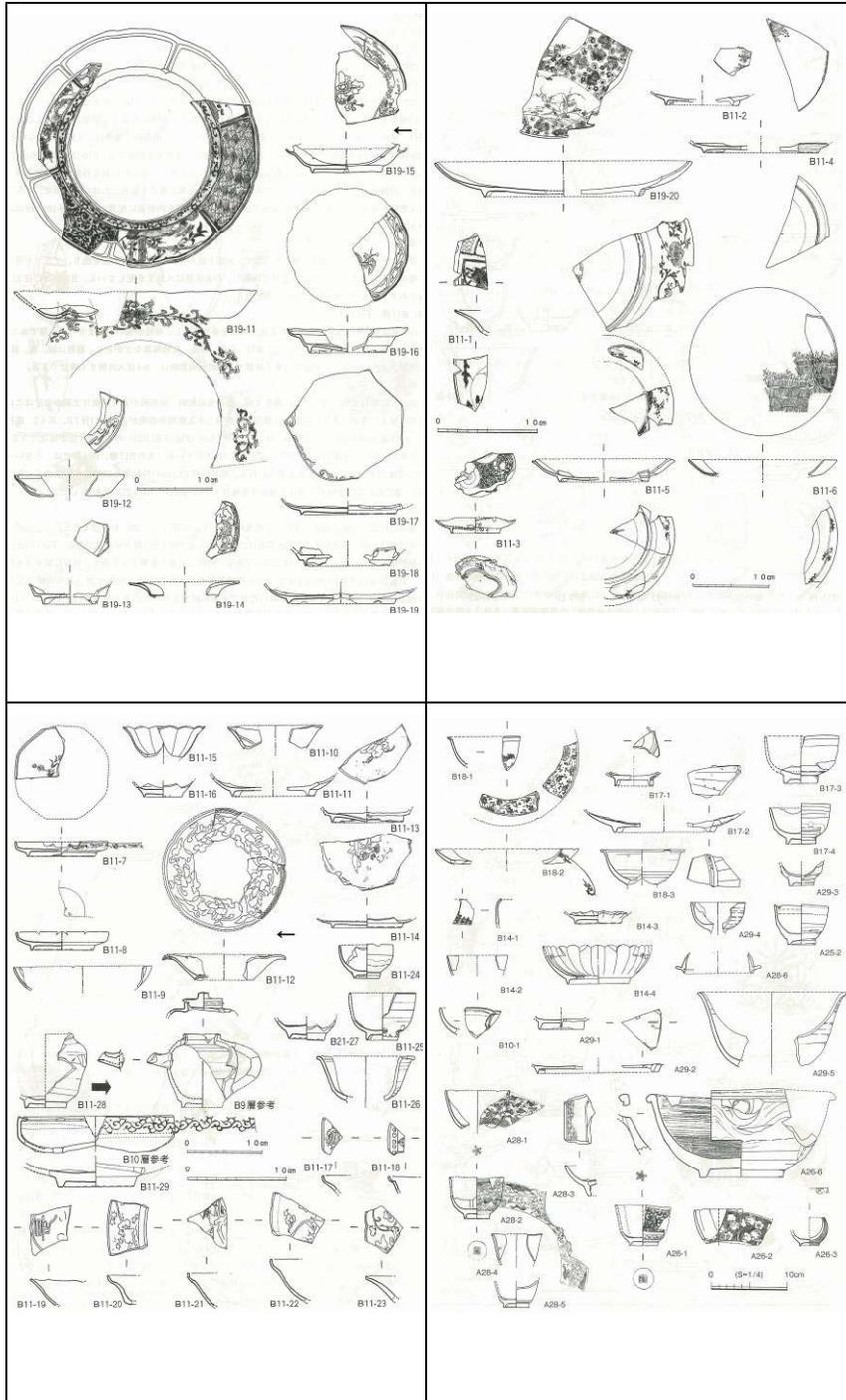


図8 南川原窯ノ辻窯跡（1990年調査）物原出土陶磁器（5）

（高島他2006. p. 43, 45, 46. Fig. 16-18, 2007. p. 71. Fig. 4より）

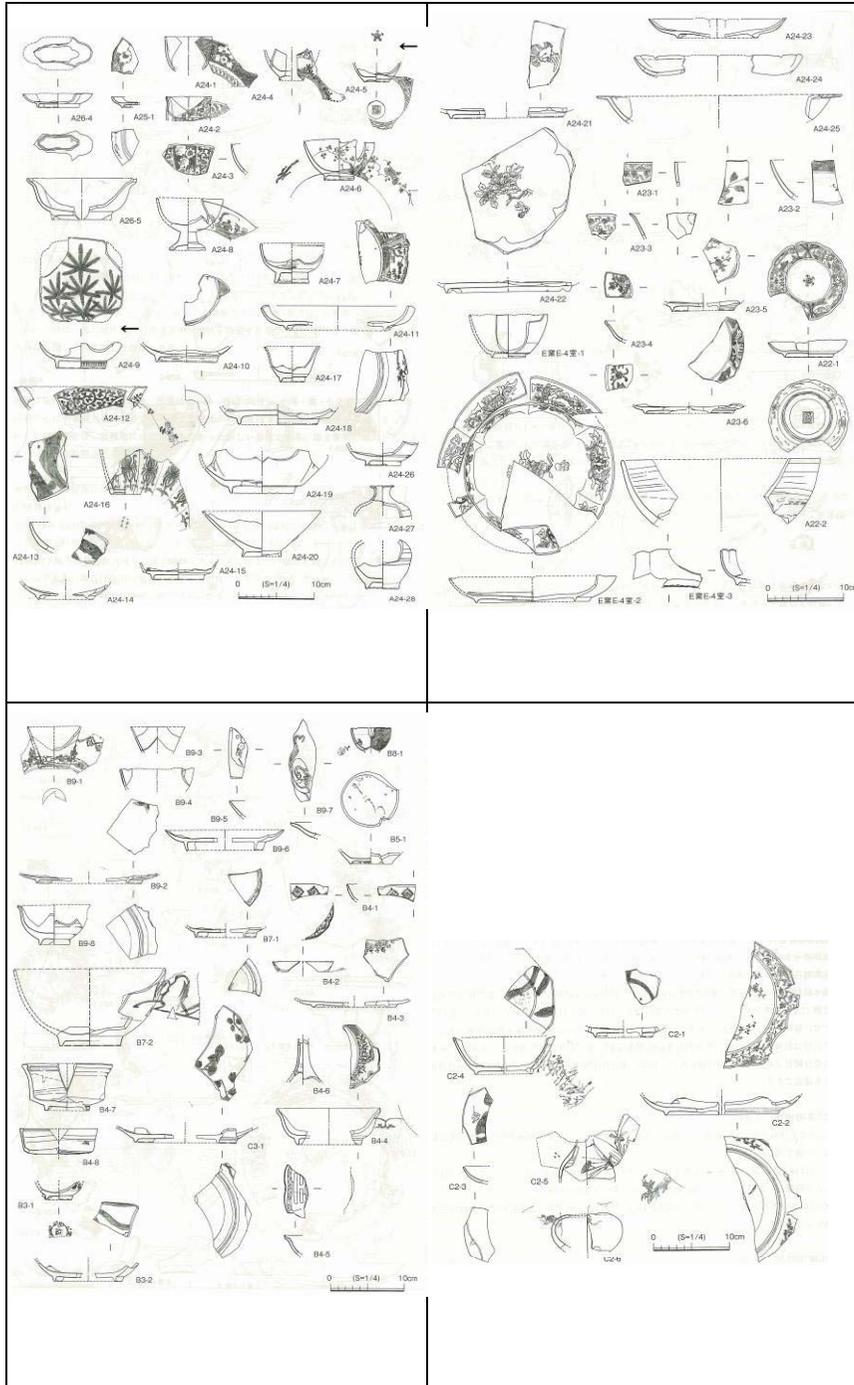


図9 南川原窯ノ辻窯跡（1990年調査）物原出土陶磁器（6）
 （高島他2007. p. 72-75. Fig. 5-8より）

◎文献抄録2007年度 報告書（2）

刊行 年	都道 府県	市町村	タイトル	シリーズ	発行者
2007	東京	新宿区	市谷仲之町遺跡Ⅷ		加藤建設株式会社
2007	東京	板橋区	徳丸森木遺跡第2地点発掘調査 報告書		共和開発株式会社・安井つる
2007	東京	文京区	真砂町遺跡 第7地点		加藤建設株式会社
2007	東京	新宿区	南町遺跡Ⅵ	東京都新宿区	岡三リビング株式会社
2007	東京	文京区	春日町(小石川後楽園)遺跡 第 10地点	東京都文京区	共和開発株式会社・株式会社東京ドーム
2007	東京	新宿区	水野原遺跡Ⅲ		共和開発株式会社
2008	東京	日野市	神明上遺跡	東京都埋蔵文化財センター調査 報告 第214集	東京都埋蔵文化財センター
2008	東京	新宿区	矢来町遺跡Ⅱ		テイケイトレード株式会社 埋蔵文化財事業部
2008	東京	港区	港区埋蔵文化財調査年報 4		港区郷土資料館
2008	東京	文京区	大塚町遺跡 第3地点		テイケイトレード株式会社 埋蔵文化財事業部
2008	東京	文京区	昌林院跡		加藤建設株式会社
2008	東京	墨田区	肥前平戸新田藩下屋敷跡		東京簡裁墨田分室埋蔵文化財調査会
2008	東京	千代田区	和泉伯太藩・武蔵岡部落上屋敷 跡遺跡	東京埋蔵文化財センター調査報 告書 第216集	東京都埋蔵文化財センター
2008	東京	板橋区	船渡遺跡第6地点発掘調査報告 書		共和開発株式会社
2008	東京	板橋区	船渡遺跡第7地点発掘調査報告 書		共和開発株式会社
2008	東京	新宿区	新宿区 若松町遺跡Ⅱ(豊前小倉 藩下屋敷遺跡)	東京埋蔵文化財センター調査報 告書 第217集	東京都埋蔵文化財センター
2007	鳥取	米子市	小波泉原遺跡	(財)米子市教育文化事業団文化 財発掘調査報告書53	財団法人米子市教育文化事業団
2007	富山	富山市	任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ	富山県文化振興財団埋蔵文化財 発掘調査報告 第34集	財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所
2007	新潟	見附市	県営圃場整備事業に伴う埋蔵文 化財発掘調査報告書XⅥ・川添 南遺跡他	見附市埋蔵文化財報告 第34	見附市教育委員会
2007	新潟	見附市	県営圃場整備事業に伴う埋蔵文 化財発掘調査報告書XⅡ・釈迦 塚遺跡	見附市埋蔵文化財報告 第30	見附市教育委員会
2007	兵庫	尼崎市	尼崎市埋蔵文化財調査年報 平 成8年度・9年度・10年度(1)		尼崎市教育委員会
2008	兵庫	姫路市	特別史跡 姫路城跡		姫路市埋蔵文化財センター
2007	広島	東広島市	広島大学東広島キャンパス埋蔵文 化財調査報告書Ⅳ		広島大学埋蔵文化財調査室
2008	福井	福井市	岳ノ谷窯跡群	福井県埋蔵文化財 第98集	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
2008	福井	福井市	大塩向山遺跡・山腰遺跡	福井県埋蔵文化財 第96集	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

刊行 年	都道 府県	市町村	タイトル	シリーズ	発行者
2007	福岡	太宰府市	佐野地区遺跡群23	太宰府市の文化財第93集	太宰府市教育委員会
2007	福岡	北九州市	黒崎城跡 2	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第364集	財団法人北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
2007	福岡	北九州市	黒崎城跡3	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第375集	財団法人北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
2007	福岡	北九州市	小倉城桜町口門跡・大門遺跡	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第370集	財団法人北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
2007	福岡	北九州市	小倉城三ノ丸跡第3地点	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第362集	財団法人北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
2007	福岡	北九州市	大門遺跡第3地点	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第363集	財団法人北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
2007	福岡	北九州市	緑遺跡1区・2区	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第365集	財団法人北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
2007	福岡	太宰府市	幸ノ元井堰－第一次調査－	太宰府市の文化財第91集	太宰府市教育委員会
2007	福岡	北九州市	大手町遺跡(小倉城外堀跡)	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第372集	財団法人北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
2007	福岡	北九州市	簗住古立遺跡	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第360集	財団法人北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
2007	福岡	北九州市	黒崎城跡5	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第377集	財団法人北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
2007	福岡	北九州市	黒崎城跡4(6・7区)	北九州市埋蔵文化財調査報告書 第376集	財団法人北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室
2007	福島	福島市	常磐自動車道遺跡報告48	福島県文化財調査報告第443集	福島県教育委員会 ・財団法人福島県文化振興事業団
2007	福島	福島市	常磐自動車道遺跡報告50	福島県文化財調査報告第445集	福島県教育委員会 ・財団法人福島県文化振興事業団
2007	福島	白河市	南湖公園確認調査報告書	白河市埋蔵文化財調査報告書 第46集	白河市教育委員会
2007	福島	会津若松市	若松城郭内武家屋敷跡 三ノ丸濠 跡	会津若松市文化財調査報告 第 110号	会津若松市教育委員会
2007	福島	福島市	常磐自動車道遺跡報告49	福島県文化財調査報告第444集	福島県教育委員会 ・財団法人福島県文化振興事業団
2007	福島	福島市	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報 告6・荒屋敷遺跡・高堂太遺跡	福島県文化財調査報告書 第43 8集	福島県教育委員会 ・財団法人福島県文化振興事業団
2007	福島	福島市	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報 告 7	福島県文化財調査報告第446集	福島県教育委員会 ・財団法人福島県文化振興事業団
2007	三重	多気郡	大会(えいげ)遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財調査報告 278	三重県埋蔵文化財センター
2007	宮城	仙台市	若林城跡－第6次・第7次発掘調 査報告書－	仙台市文化財調査報告書第306 集	仙台市教育委員会
2007	宮城	多賀城市	高崎遺跡－第56次調査報告書－	多賀城市文化財調査報告書第89 集	多賀城市教育委員会
2007	宮城	多賀城市	多賀城市内の遺跡－平成17年度 発掘調査報告書－	多賀城市文化財調査報告書第88 集	多賀城市教育委員会
2007	宮城	仙台市	仙台北城跡7	仙台市文化財調査報告書第309 集	仙台市教育委員会
2007	山梨	甲府市	甲府市内遺跡IV	甲府市文化財調査報告 35	甲府市教育委員会

通信費改定のお知らせ

日頃から江戸遺跡研究会の活動にご理解をいただきありがとうございます。

さて、本研究会では、会報の印刷・通信費として、年間1,000円をお預かりして、連絡を差し上げてまいりました。しかし近年、充実した内容の例会発表要旨が多く、文字のポイント数を下げるなど努力して参りましたが、会報のページ数の圧縮には至らず、それに伴う印刷費、送料がかさみ、会の運営を圧迫する自体に陥っています。

昨年の例を挙げますと、会報5回、例会案内はがき1回、大会案内1回を送付しましたが、その総額は493,228円となりました。現在の会員数（通信費納入者）は307名で年間通信費総額は307,000円で、約200,000円の赤字となっています。

今までは、大会資料集のバックナンバーの売り上げによって、赤字を補填してきましたが、資料集の年間売り上げより通信費の赤字額が上回り、健全な会運営を行うことが非常に難しく、本年より通信・印刷費を以下の通り改定させていただきます。

会の現状をご理解いただき、今後とも会報の送付を希望される方は、改定金額をもって平成20年の印刷・通信費とさせていただきます。

また、今後は本会ホームページ上の大会・例会案内や会報電子版のみを利用され、会報の送付が必要ない方は、ご面倒でもその旨を世話人まで連絡していただきますようお願い申し上げます。

記

江戸遺跡研究会会報印刷・通信費

現状1,000円を平成20年分より、2,000円とする。

江戸遺跡研究会世話人一同

振り込み用紙を同封させていただきました。
今後とも会報の送付を希望される方は、記載
金額を通信費として振込みをお願いします。